



## 英語のジョーク宅配便

Vol. 129 September 24, 2012

### OUR MISSION STATEMENT

「人を知る最善の方法は、苦しい仕事を一緒にすることと、ジョークを言うこと」と言います。これを「英語で発信」というのが本紙の使命で、受動から能動への一歩です。「英語のジョークを楽しむ会」が活動領域をさらに広げようという試みです。地球の一体化が益々進む時代、「英語でジョークを」は、新しい意義を加えるでしょう。

英語のジョークを楽しむ会 (Joke-Loving Club=JLC) 代表・宮本倫好

- 本紙は、原則として、毎週月曜日に配信します。
- 執筆者は右の五名の本会会員です。相原悦夫、岡田茂富、田村公雄、土屋政雄、豊田一男

### ■本日のお届け品: A Noose or News Story

Today's headline said:  
TWO CONVICTS EVADE NOOSE;  
JURY HUNG



#### 【和訳】

「陪審が評決不能 (JURY HUNG) で、囚人が死刑を免れた」というところでしょうか。NOOSEは絞首刑 (のときに首を突っ込む縄の輪) のことです。読み方によっては、囚人が死刑を免れて、陪審団のほうがかぶるされた、とも読めます。

#### 【笑いのツボ】

意図されたものか、偶然こうなったのか、実際にあった新聞の見出しです。前回のジョーク・コンテストに出したところ、あまり受けがよくなく、一票入っただけでした。が、紙面ではパッと目に飛び込んで来て、とても面白く感じました。同時に、昔翻訳したラッセル・ベイカー著『グッド・タイムズ』という本の一節を思い出しました。著者はニューヨークタイムズの名物コラムニストで、警察回りをしていた駆出し記者のころ、先輩から記者の理想像をこう教えられたそうです。

新聞記者はすべからく図太い神経をもち、ストリッパーの腰からバタフライが落ちようが、死刑囚の体が絞首台からつるされようが、それを等しく平然と受け止め、適当な冗談の一つも言えなければならない [……]。そして、ある男の話が、記者の理想像として昔から語り伝えられていた。[……] ある夜、とりわけ手際の悪い処刑に立ち会ったその記者は、社会部デスクに電話し、「特別読み物に仕立てますか、それともただのニュース (ニュース) 記事でいきますか」と尋ねたという。

- 担当は、土屋政雄でした。